「薬草を楽しむ」　No.058

ヒカゲノカズラ（日陰の蔓）

牧　　幸　男

古い習慣が次第に薄れて行くが、お正月の行事だけは、今日でも残っているものが多い。この行事と一体となって主役を演じる植物がある。代表的な植物は、松竹梅であるが、ウラジロ、橙（だいだい）、ヒカゲノカズラ、福寿草、万年青等も飾られることが多い。この中で、ヒカゲノカズラと竹は、お祝い事に使われていた歴史では最も古い植物であろう。両者ともに『古事記』（712）に記述されているが、なんと言っても主役は日陰の蔓である。

天照大神が身を隠した天の岩戸の項に「天宇受売命（あめのうずめのみこと）は、天の香具山に生える天（ひかげ）の日陰（かずら）を襷に掛け、天（まさき）の真拆（かずら）を髪飾りとし頭を結い、天の香具山の小竹葉（さささば）を束ね採物（とりもの）とし手に持ち、天之石屋戸に汗気（うけ）（空槽（おけ））伏せて、踏み登杼呂許志（ふみとどろこし）（轟かし）、神懸為（がむがかりし）て、胸乳を掛き出で、裳緒（もひも）を番登（ほと）に忍し垂れき。爾高天原（かれたかまがはらゆす）動りて、八百万の神共に咲（わら）いき。」と、日陰の蔓のことが詳しく記述されている。以来この植物は神聖な植物の代表となり、様々な祝賀行事に使われるようになった。現在でも宮中で行われる豊明節会（とよのあかりのせちえ）（新嘗祭・大嘗祭の翌日、宮中で行われた宴会）に舞姫たちの冠の笄の左右に採用されている。後世になりこの飾りの名残が、青色か白色の組糸を垂らすようになったのである。この様子について『枕草子』（1001～1012）や『源氏物語』（1001～1005）、『栄花物語』（1208～1092）等多くの書物の記述されている。恐らく、枯れてもいつまでも緑を保っている姿から、生気あるものと思われ、神祀やおめでたい場所に用いるようになったのであろう。

ヒカゲノカズラ

分布は、日本では沖縄以外に広く生育している。国外では世界の北半球の温帯から熱帯域の高山にまで見られ、分布は広い。そのため変異も多い。日陰の蔓はヒカゲノカズラ科の常緑性シダ植物。葉は緑色から黄緑色で、開出あるいは斜上し、線形か広線形で、上方が多少内曲している。茎は長5㎜地表をはい、針状の葉をつける。互生する側枝は直立し、さらに枝分れする。この枝の先に円柱状で長さ5ｃm前後の胞子嚢穂（のうすい）を頂生する。胞子嚢穂は淡黄色、長さ3～5cm 経4～6㎜円柱形である。この胞子嚢穂が横に裂けて黄色の胞子を出す。これがいわゆる石松子である。牧野新植物図鑑にはヒカゲノカズラと名がついている植物が3種収載されている。ミヤマヒカゲノカズラ L.aipinum、タカネヒカゲノカズラ L.sitchenes である。

ヒカゲノカズラの胞子嚢穂

本種の変異には、葉がやや硬くて胞子嚢穂の柄がより高いナンゴクヒカゲノカズラ L.c. var.wallichianum Spring、這っている見かけはヒカゲノカズラによく似ているが、胞子は立ち上がって針葉樹のような枝振りになった、直立茎の先端に着いて下を向くミズスギ L. cernuum L.、匍匐茎は横に這うが、側枝はほとんど分枝せず直立するスギカズラ L. annotinum L.がある。

植物学上では、古い歴史があり、我が国では正月飾りや花輪、卓上飾りに利用されてきた。また、ヨーロッパでも神聖な植物としてクリスマスの装飾に使われている。古くから生活の一部に取り入れられていたたことは『万葉集』(629～759）4 首収載されていることから分かる。他に、京都の伏見稲荷大社の、新年を寿ぎ国家の安泰と一年の無事平穏を祈る大山祭では、参拝者に御神酒と日陰の蔓授与される。また、京都の賀茂別神社では、正月の最初の卯の日に、日陰の蔓を中心に用いた卯杖社殿に飾り、祈願した卯杖は宮中に献上される。更に、新嘗祭.新嘗祭には以前日陰の蔓が飾られたという。2019 年 11 月の大嘗宮の儀では、衛門（衛士）は、冠に日陰の蔓をかざり、また天皇が通る雨儀御廊下は天井から日陰の蔓が吊り下げられていた。

古くから親しまれてきた植物だけに、詩歌の対象になってきた。

見まくほり　思ひしなへに　縵(かずら)かげ　かぐはしき君を　相見つるかも　　大伴家持
ゆたゆたと　日陰かづらの　長かずら　極にかけて　年ほぐわれは　　伊藤左千夫
初夢に　顔なでるなり　玉日陰　　紫雪
かけまくも　長きためしや　日のかずら　　断舟

植物名の由来について牧野富太郎博士は和名「日陰の蔓」の意で、陰地に生ずるつる植物の意味と述べている。古い『倭名類聚抄』(931）には、「蘿髭二字をもってひかげのかずらとよめり」とある。しかし、日なたに出ることを意識した名との説もある。詳しいことは不明である。湿った日なたの傾斜地によく生えるが、あまり湿地には出ない。漢名の石松は天台山の石の上に生ずる松に似ているのが由来と言われている。別名は石松(せきしょう)、狐の襷(たすき)、天狗の襷、神襷、兎の襷、山姥の襷、猿首巻等多方面に利用されてきたので数が多い。古名には蘿(かげ)、ヒカゲ（日陰、日陰)、カゲ、女蘿がある。なお、英語名はGround pine やRanning pine と呼び植物の姿を呼んでいる。

学名はLycopodium clavatum、属名はｌｙｋｏオオカミ+podion 足鱗片葉の密生した茎が狼の足に似ているため、種小名は棍棒状の意で、成長する胞子嚢が、棒状成長することによる。

薬用は、地上部の日乾した全草の生薬名は石松、この中から芽胞を採取し、生薬名を石松子(し)と呼んでいる。石松は止渇、利尿に用い、石松子は脂肪油が 40～50％も含まれているため、吸湿性が全くないため、丸剤の防湿と変質を防ぐための衣や皮膚のただれの治療に散布薬として用いる。

その他、植物を乾燥させると比較的緑を保ので、変わった姿、紐状で様々の形に加工ができるので、ドライフラワーやアート素材などとして用いる。また、金魚の養殖では、これを産卵巣に使う例がある。その他、高級料亭で川魚などに添えて飾る例もある。胞子を線香花火や塗料、果樹栽培の花粉増量剤に使う。現在、日本で使用する石松子の量は大分部欧米から輸入している胞子の粉末に火をつけると、大きな光を発して瞬時に消える。その為、以前ヨーロッパでは劇場の舞台のフラッシュ照明に用いたと言う。ドイツでは胞子を Blitz-mehle 電光の粉末又は稲妻の粉の意）と呼んでいる。前述したが我が国でも正月飾りに使ってきたが、欧米ではクリスマス・ツリーを飾り、その折食卓の飾りにも敷くことがある。

ヒカゲノカズラ科は世界に約450 種あり、日本には約20 種生育しているが、これほど人々に親しまれている植物はないと思う。

花言葉は「長寿」「お正月」「病気平癒」である。